



被災地派遣職員レポート



3月11日に起こった未曾有の大震災。東日本大震災の被災地である宮城県気仙沼市を支援するため、串間市からも職員を派遣しました。活動の内容や心に刻んだ思いなどをつづってもらいました。

串間市民病院
事務次長

吉岡久文



3月11日のあの未曾有の災害を目の当たりにし、自分には何もできない、募金をするぐらいしか役に立たないと思っていた。しかし、このたび被災地での支援活動をする機会を得て、生涯かけがえない体験をさせてもらったと思う。

気仙沼市の総合体育館には、500人ほどの被災者が避難していた。震災から2カ月がたち、避難所は徐々に落ち着きを取り戻しつつあったが、被災者の置かれた環境は楽観できるものではなかった。

まず、住む家がない。仮設住宅の建設が進んでいないが、まだ入居できる状態ではなかった。次に、最も切実な問題として仕事がない。勤めていた事業所が被災したことで職を失い、また個人経営者や漁

業者はその生産基盤を失った。言葉にこそ出さないが、明日の生活をどう支えていけばいいのだろうという思いが伝わってくる。

わたしたちは、この避難所で被災者の支援業務に従事した。物資の配給、罹災証明の発行、家屋解体、義援金、仮設住宅などに関する申請など。何より、被災者の方々の話し相手になること。最愛の家族をなくし、悲嘆にくれる被災者にかかる言葉はむずかしい。「がんばろう」と励ますことより、気持ちを共有することが先だと知った。職員もまた被災者であり、家庭を顧みず公務に従事している。同じ自治体の職員として、少しでもお役に立てたなら本当にうれしい。最後に、活動を遠方から支援してくれた市当局をはじめ、すべての友人、同僚に感謝してやまない。

市民生活課
課長補佐

河野博彦



5月26日から6月3日までの間、宮城県気仙沼市総合体育館で避難所の支援活動にあたった。

当日の午後7時過ぎに現場に到着し、業務の引継ぎを受けた。避難所では約450人が生活されていた。最初に受けた印象は「暗い・元気がない」。他人との長期間の避難所生活では無理もない話。

避難者は、班ごとに配せんやトイレ掃除などの役割を分担し、自主的な活動を行っていた。生活スペースはかなり狭く、簡易な仕切りがあるだけ。疲労やストレスは大変なものだったと思う。

私は終日「総合受付」を担当した。業務は、避難所の人・退去のデータ管理、来館者や避難者の対応、支援物資の仕分けなどで多くの人と接する機会があった。一番困ったことは言葉の壁。何回も目が点になった。つらかったのは支援を受けに来られた方に帰ってもらうこと。ライフラインもほぼ復旧し、自立を促すための対策だという。6月1日から避難所以外の方には食事を配給しないことになった。「同じ被災者なのになぜ扱いが違うのか。自分達の方が苦しいのに」小さい子供連れだった。断るしかなく一番胸が痛かった。

1時間ほど被災地を案内してもらった。がれきの山があちこちにあり、大型トラックがひっきりなしに走っていた。復旧が本当にできるのか。そう思わせる光景が広がっていた。

微々たる力ではあったが一生懸命対応した。いつか復興した気仙沼に行ってみたいと思う。

総務課
主幹兼危機管理係長

田中孝士



串間を朝6時に出発し、気仙沼に夜の7時半ごろ到着。駅に降り立ち最初に震災を感じたのが臭い。魚の腐った臭いが町中に充満していた。これは津波で冷凍倉庫から流れ出したマグロなどが腐った臭いであると聞かされた。次に道路の凹凸、タクシーが飛び出したマ

ンホールの蓋をよけながら走る。到着した避難所で最初に案内されたのが、これから一週間寝泊りする2階の部屋。硬い床に寝袋が不規則に並び、既に就寝している者もあった。疲れた体を休めるため早

めに寝袋にもぐりこんだが寒さのため眠れなかった。起床後、業務の引継ぎとなり私は物資倉庫の担当となる。ここで食料の受け渡しや、資材の搬入を行った。避難所の状況であるが、震災直後は1千人以上の避難者が収容されていたが、現在は450人程度にまで減少していた。世帯ごとに高さ1メートルくらいの仕切りで区切られているものの、全くプライベートは守れない状況である。我々支援の者は洗濯機やシャワーの使用は許されておらず、トイレの手洗いで洗髪や体拭きをおこなったが、出口の見えない避難所生活をされている人たちのことを思えばそれも苦ではなかった。そんなある日、高齢の婦人が私の腕章を見て串間市とはどこですかと尋ねてくれた。宮崎県ですと答えると「まあ、そんな遠くから」と、深々頭を下げられたのが心に強く残った。活動はわずか七日間で支援になったのか分からないが一日も早い復興を祈りながら気仙沼を後にした。

総務課
危機管理係主査

小城辰男



わたしの被災地支援の配置先は、避難所である気仙沼市総合体育館で、支援物資の受け入れと整理、配せん準備などの業務に従事した。

避難所には、個人や会社などからの支援物資が毎日届き、被災者の方々への心温かい激励メッセージが添えられていた。食事は自衛隊や業者（すかいらくグループ）の炊き出し支援が毎日行われ、温かく、栄養バランスのとれた食事が提供されるなど、サポート体制は充実していた。

避難所では、毎日の配せん作業、トイレ・廊下などの清掃、ゴミの回収など、避難者の方々がそれぞれ担当を決めて作業を分担しており、小さな住民自治が確立していた。この避難所には、気仙沼市職

員も配置されていたが、避難者の方々の生活にできるだけ口を出さず、自立を促しており、基本的に連絡調整役に徹するなど、自助・共助・公助の役割分担が明確になっていることが印象的だった。

わたしたちが派遣されたときには、電気・水道などのライフラインは復旧していたが、避難者の方々は、毎日強い余震を感じながら断水・停電・食糧不足の中で避難生活を余儀なくされてきた。

わたしはいま、串間に戻り、ごく当り前の生活のありがたさを感じている。最後に、東日本大震災でお亡くなりになった方々のご冥福と、長引く避難所生活を余儀なくされている被災者の方々が1日でも早く元の生活に戻れるよう、心から祈りたい。

うたごよみ

*短歌、俳句の投稿は

- 短歌 野辺 俊子さん (☎72-3300)
- 俳句 本田 幾男さん (☎72-5280)

「短歌」串間短歌会選

麦の穂の熟する頃に再びを訪いて行かむかあの岡畑に
 ヘルパーの吾にも介護の母の在り労いの言葉主任に給ふ
 野いばらの下をくぐりて来し水か花びら浮かべると行く
 さわさわと枝ゆらしつつ青嵐光の天使伴ないて吹く
 今になり手元置きたし十八の荷造りしつつ手しばし止まる

- 上中園…鍋倉文子
- 堂園…吉田良子
- 上中園…国府須賀子
- 西小路区…矢野笛美
- 一般投稿歌
立字津…中村時子

「俳句」あさひ俳句会選

ぼうたんの崩るる吐息聞いてをり
 九十九折り視界開けぬ夏木立
 帰省して大の字になる広間かな
 香炷くや夫徳ぶ日の沙羅の花
 住む地球の丸さ見ている夏の朝

- 上町区…又木順子
- 上小路…本田ハズエ
- 春日…水元栄子
- 仲町…木島幸子
- 仲町…原里歌

【お詫言】6月1日発行の本紙1ページ「うたごよみ短歌1首目」は「きみどり」は「春暉」は「春暉」同投稿者地区名「里木町」は「南今町」の誤りでした。お詫言し「訂正」します。